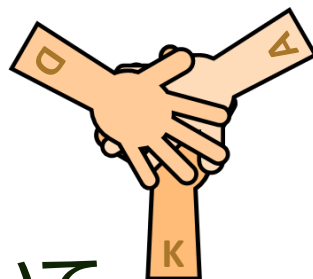


令和6年度第59回盛岡市教育研究所研究発表大会
令和5-7年度 研究指定校分科会
「小中一貫教育」中間発表



厨川中学校区 連携研究推進について

厨川中学校区ブロック研究会
盛岡市立厨川中学校
盛岡市立青山小学校
盛岡市立大新小学校

本日の内容

- 1 研究主題について
 - ▶ 現代社会の要請から
 - ▶ 児童・生徒の現状から
 - ▶ 新生徒指導提要の観点から
- 2 各校の現在までの研究実践
 - ▶ 厨川中 ▶ 青山小 ▶ 大新小
- 3 中間まとめ

▶小中連携指定について

◎指定内容：小中一貫教育

◎目的：小中9年間の義務教育期間において、共通の目標を定め、小中の教員が協力し、**指導の連続性を確保した継続的な指導**を行うことにより、児童生徒一人一人の個性と能力の伸長を図り、子どもたち一人一人に、**自立して社会で生きていくための基礎を育む**。

1 研究主題

協働して、よりよく生きようとする
児童・生徒の育成

～安定と柔軟性がある学級集団づくりを通して～



【研究主題・副題は3校共通とする】

【校内】→具体的な手立ては各校の現状と重点課題に合わせて決定、実践する。

【連携】→児童会・生徒会、地域活動等を中心とする。

1 研究主題 / 現代社会の要請から

これからの時代を生き抜く力

◎現実の世界の中で自分自身を深く知り, **他者と共に協働して生きる力**

◎自らの学びを調整し組み立て, **実際に動きを生み出す力**

◎予測不可能な未来に対し, **乗り越えるための準備が**できている

予測困難な時代



ラーニングコンパス 2030(学びの羅針盤)

◎Well-Being
ウェル・ビーイングの考え方

→ **自分の生きる道だけではなく,** 家族や友人, 自分の住む街・国がどのようにすれば「**良い状態**」でいられるのかを考えること

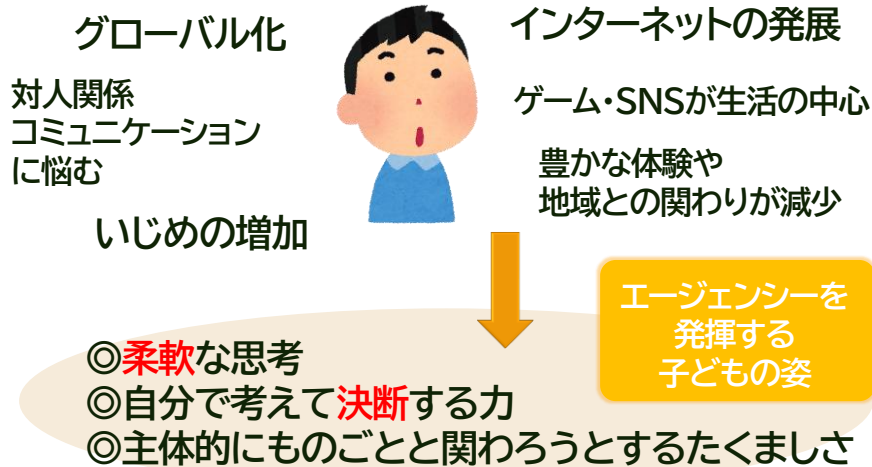
◎エージェンシーの育成
・学習者エージェンシー
・共同エージェンシーの発揮

→ **変化を起こすために,** 自分で目標を設定し, 振り返り, 責任をもって行動する能力



OECD Future of Education
and Skills 2030 project
(教育とスキルの未来2030プロジェクト)

答えが一つではない様々な課題を、**自分事として捉えて向き合っていく**必要がある。



1 研究主題 / 児童・生徒の現状から

学力状況調査/質問紙 等から

- △ 自己肯定感、有用感が低い
- △ 学力不振、学習意欲が低い



他と関わり合いながら、自分で人生を切り開いていく強さとしなやかさを育てたい！

各校の実態に合わせて有効な手立てを組む

- ・教科授業を通して
- ・学級集団づくりを通して

◎「よりよく生きる」姿勢を育てる

→自己実現、自己決定のできる子ども

- ・判断の場面において、人間としてよりよい生き方を選択しようとする
- ・自分の利益を追求するだけでなく、集団や社会の一員としてよりよく生きようとする

◎「協働して生きる」姿勢を育てる

→対話を通じた合意形成を目指す子ども



- ・対立はあって当たり前！
- ・いかに歩み寄り、共通解を導き出すか。
- ・時には「A vs B→C」を生み出せる柔軟性を。

R6 厨川中学校校区ブロック研究会(講演会) 7月8日

「協働的な学びを支える学級集団づくり～非認知能力の育成～」

【講師】早稲田大学教育・総合科学学術院 教授/博士(心理学)
河村 茂雄 先生

- ▶成長や学びの母体となる学級集団が、なかなか落ち着かない。
- ▶かつての生徒指導の考え方だけでは、うまく対応できていない。
- ▶新生徒指導提要の視点を生かし、確かな子ども理解を進めていきたい→教師の意識のアップデートが必要。

素直な子どもと真面目な教師…なぜ子どもの学力は低いのか？育てるべきは…

自律的学習者(アクティブラーナー)

・活動・学習自体に興味をもち、自ら取り組んでいる生徒。どこまで自分でやれるか。

協働学習を実質化させるための学級集団づくりを！

1 研究主題 / 新生徒指導提要の観点から

「生徒指導の実践上の視点」を生かす(生徒指導提要/令和4年度版)

- 1 自己存在感の感受
- 2 共感的な人間関係の育成
- 3 自己決定の場の提供
- 4 安全・安心な風土の醸成

旧「生徒指導の三機能」
①自己存在感を与える
②共感的な人間関係を形成する
③自己決定の場を与える

生徒指導の目的を達成するためには、児童生徒一人一人が**自己指導能力**を身に付けることが重要

生徒指導の実践上の視点

自己存在感の感受

- 「自分も一人の人間として大切にされている」という自己存在感を、児童生徒が実感することが大切
- 自己肯定感や自己有用感を育むことも極めて重要

共感的な人間関係の育成

- 失敗を恐れない、間違いやできないことを笑わない、むしろ、なぜそう思ったのか、どうすればできるようになるのかを皆で考える支持的で創造的な学級・ホームルームづくりが生徒指導の土台

自己決定の場の提供

- 授業場面で自らの意見を述べる、観察・実験・調べ学習等を通じて自己の仮説を検証してレポートする等、自ら考え、選択し、決定する、あるいは発表する、制作する等の体験が何より重要

安全・安心な風土の醸成

- お互いの個性や多様性を認め合い、安心して授業や学校生活が送れるような風土を、教職員の支援の下で、児童生徒自らがつくり上げるようにすることが大切

東京都教育庁指導部「生徒指導提要(令和4年12月)」のポイント(個別の課題編)から

重層的支援構造

生徒指導の構造(2軸3類4層構造)

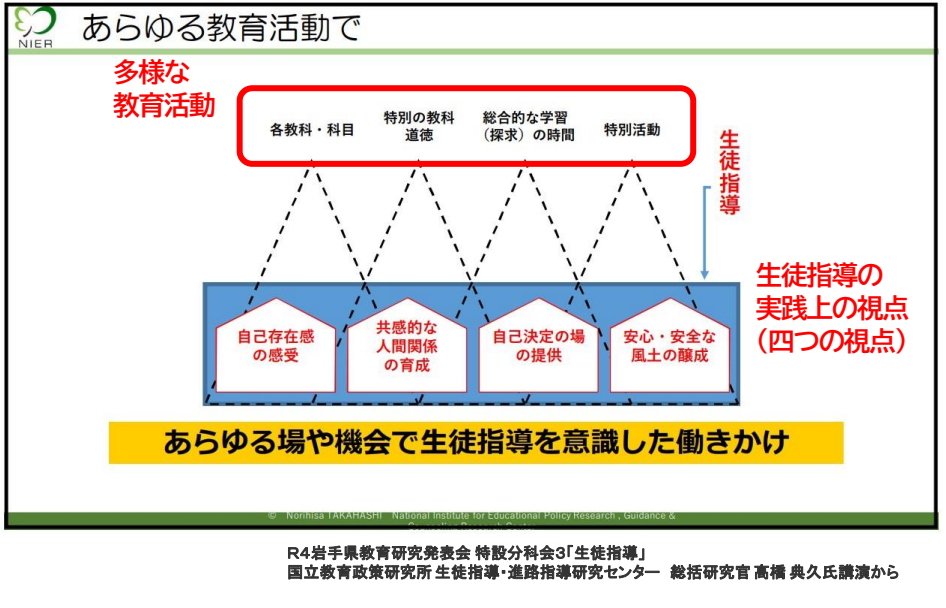
生徒指導と言うと、課題が起き始めたことを認知したらすぐに対応する(即応的)、あるいは、困難な課題に対して組織的に粘り強く取り組む(継続的)というイメージが今も根強く残っています。しかし、起きてからどう対応するかという以上に、どうすれば起きないようにするのかという点に注力することが大切です。



→リアクティブからプロアクティブな指導支援へ
→予防的生徒指導から成長を促す「開発的生徒指導」

東京都教育庁指導部「生徒指導提要(令和4年12月)」のポイント(個別の課題編)から

あらゆる教育活動と生徒指導を関連付ける



2 各校の現在までの研究実践

協働して、よりよく生きようとする
児童・生徒の育成

～安定と柔軟性がある学級集団づくりを通して～

9年間で育てる子ども像の共有

厨川中

学級集団づくり
を通して

青山小

教科授業改善
を通して

大新小

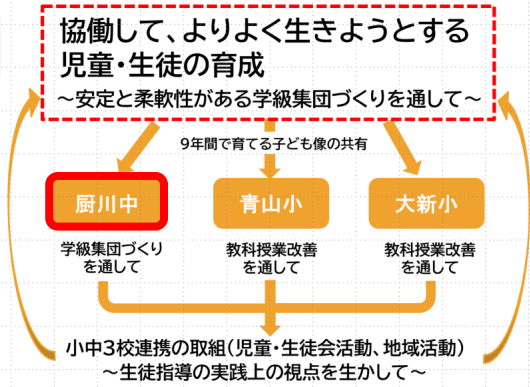
教科授業改善
を通して

小中3校連携の取組（児童・生徒会活動、地域活動）
～生徒指導の実践上の視点を生かして～

2 各校の現在までの研究実践

厨川中の実践

学級集団づくり
を通して



日本の学校における学級集団の特性の観点から

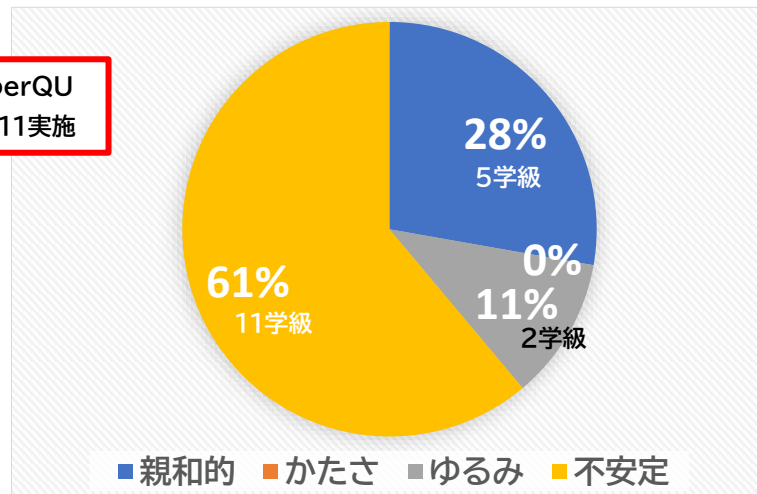
学級集団は、子どもたちが1日の大半を過ごし、学習面や生活面で子ども同士がかかわることが多い
共同体の特性をもった閉鎖集団である。(河村2010)



学力状況調査
/質問紙 等から

△ 自己肯定感、有用感が低い
△ 学力不振、学習意欲が低い

hyperQU
R5.11実施



◆近年の子どもたち / 気になる傾向

- ◎学級内で小グループで固まり、他グループとは交わらない
 - ・内輪の友達同士にのみ、ナーバスな関心 / 過剰適応
 - ・ × 学級集団の一員 ⇔ ○ 内輪で楽しむ

◎最近のQUの結果から

- ・友人関係得点[高] 学級とのかかわり得点[低]
- ・「配慮のスキル」と比べて「かかわりのスキル」が低い
→学級内の子どもとの交流が低調に
- ・非認知能力(自律性と協働性)が低い
- ・学習性無気力の増加
(自分からはSOSを出さない)

特にココにアプローチしたい！



目指す学級/子どもの姿

安定と柔軟性



- ◎子ども個々の関わり合いが、穏やかに日常生活に溶け込んでいる。リレーション(親和的な人間関係)が形成されている。
- ◎特別支援の必要な子どもも周囲から浮かない(支援を受けていても目立たない)。
- ◎問題のない状態を目指すのではなく、問題があっても子ども同士でカバーしながらやっていける。



安定と柔軟性

自治

- ・問題を解決に向かわせる
- ・ルールとリレーションのバランス
- ・理由と目的あつての行動

多様性の受容

- ・多様な個の状況への理解
- ・他への優しさと柔軟性のある受け止め

建設的な相互作用

- ・協力し合って高め合う
- ・改善のための工夫
- ・いごちが悪くない
- ・うまく付き合える

◎現在行っている指導・支援が基本

→目的・意義・手立ての詳細を明らかにして取り組む！

- ① 成長をしかける指導・支援 ② 後追い指導からの脱却
③ 明るく楽しく！学級、子どもの変化を自分の喜びとする
学級経営

(1)QU分析に基づく学級アセスメント

→学級経営案のリフレクションに生かす

(2)学級/集団づくりの手立ての工夫

→課題にアプローチするCSSの実施

(3)CAPDサイクルの重視

→学年経営の定期的ブラッシュアップ

(4)子どもを動かす、任せる場面を増やす

→提案をルーティンにしない

→目指す姿と手立てを共有し、必ず検証する



CSSの実施

人とかわかり、ともに生きる
ためのルールやマナーを学ぶ

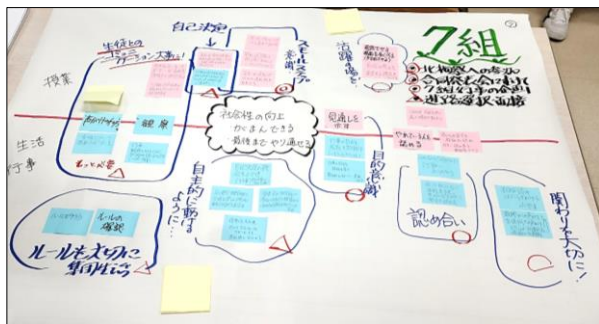
学年の課題に
アプローチするものを
ピックアップして実施



学年経営のリフレクション

学期ごとの振り返りを具体的に
話し合う機会をもつ

成果と課題を明らかにし、
可視化して掲示する。
前向きな改善案を共有する。



子どもを動かす 任せる場面を 増やす

生徒会や委員会、日常における生徒の活動が、真に主体的なものとなるように、

- ・事前指導の充実
- ・思い切って任せる
- ・建設的な振り返りと次への展望

上記のステップを重視する。



3 中間まとめ

◎今年度、河村先生の講演会を開くことで、研究の基盤となる「新生徒指導提要」の概要や成長・学習集団としての集団づくりのあり方について、3校で確認することができた。

◎これまでの研究を生かして、各校で子どもの課題に即した実践を進めることができた。

- ▶児童・生徒の交流については、中学校がうまくリーダーシップを取って進めることができなかった。今後、連携をどう子どもの成長につなげていくか、さらに検討を重ねたい。
- ▶地域清掃が猛暑のために中止になるなど、実施の方法について再考が必要なものもある。
- ▶コロナ禍で、学年、リーダーとして必要な経験が不足している子どもが多い。その現状を踏まえて、成長の道筋を模索していきたい。